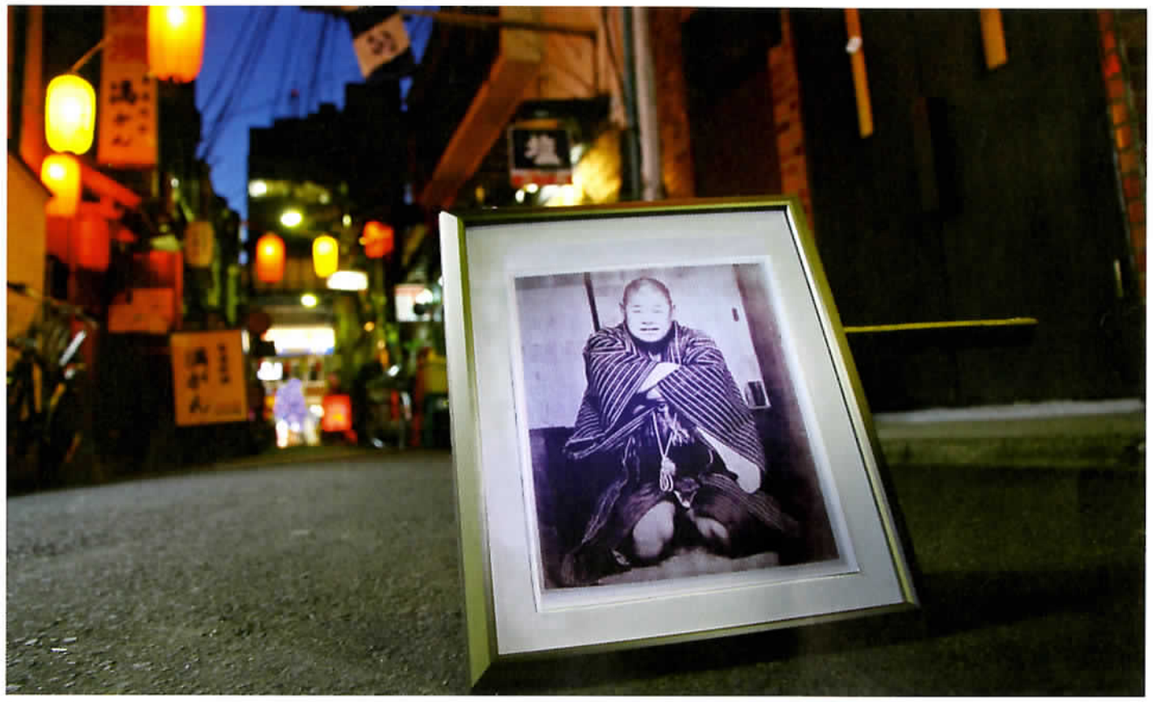
2011年3月1日発行(創刊2002年3月31日)

仙台文学館ニュース

第二十号

Sendai Literature Museum News



「仙台四郎」文化横丁にて

文学のある風景

仙台四郎

コウタは手を洗いながら、今夜、ノゾミさんから申し出られた話を思い出していた。

「お願いがあるの。ぜひ協力して欲しいの。このイベントを成功させたいのよ。それにはコウタ君の力が必要なの」

そう言われてしまうと力になりたい。

「それで何をすればいいんですか」

「江戸時代の侍、商人、物売りの姿をしてイベントに参加して欲しいの。大切なイベントなの」

「ボクが侍の恰好をして歩くんですか?」

「侍が嫌なら、飛脚はどう?似合うと思うんだけどな、コウタ君」

ノゾミさんの話では飲食業の人たちがそれぞれ、江戸時代の姿で通りを練り歩くイベントをするという。

――話の最後に何だか変な名前をノゾミさんが言っていたな…。何だっけ?

思い出した。コウタとノゾミさんが座った席から店の調理場が見えて、その壁に古い写真が貼ってあった。

「あれ何の写真ですか」と質問したんだ。

「センダイシローさんですよ」

店長が言った。

「誰ですか、その人?」

ボクが訊き返すと、隣でノゾミさんが言った。

「えっ、仙台に一年半もいるのに、コウタ君、仙台四郎を知らないの」

「は、はい…」

「福の神よ。私たちお客さん相手の商売をしている人にとって仙台四郎は福の神なの。彼が店にやって来ると、それから急にお客さんがたくさん来るようになって店が繁盛するの」

「へぇー、そんな人がいるんですか。皆さん、その人に逢ったんですか」

コウタの言葉にノゾミさんも店長もミヤコヤさんも苦笑いをした。

「逢ってはいないわよ。江戸から明治時代の人だもの。でも、実在の人物なのよ。とてもやさしいこころねの人でね。純粋無垢。だから天使というか、福の神になれたんじゃないかしら」

(伊集院静「青葉と天使」17『河北新報』二〇一〇年10月18日)

小池 光の 気になる日本語 9

「おそれ入ります」

書店のカウンターに本を差し出すと、きまって「カバーはおつけしますか」と聞かれる。

いらないと言うと(わたしは本にカバーするの嫌い)、必ず、

「おそれ入ります」

と答えが返ってくる。どこの本屋にいってもそういわれる。関東圏だけの現象だろうか、仙台でも同じように言うのか、全国どこへ行ってもいまそう言うような気がする。

本にカバーをかけるのは書店のサービスで、求められればする義務があるが、その手間を省いてくれて、紙の無駄もなくしてくれてありがたい。そのお客の態度に「おそれ入ります」と応ずるわけである。

この応対のたび、小さな違和感がうかぶ。そんな程度のことでおそれ入られることはないと思うのだ。思わず、いや、おそれ入ってもらわなくても結構です、と言いたい気持ちがわいてくるのであるが、まだ実際にそういうイジワルを言ったことはない。(今度どこかで言ってやろう)。

敬語や丁寧語には、「サイズ」みたいなものがある。その場その場でサイズに適したものを用いるのが正しいことばのあり方である。なんでもかんでも丁寧にいえばいいというものでない。ところが現代の敬語はともすればこのサイズを忘れて、どんなときでも最上級のそれを発し、どうだ、こんなに丁寧に言ってるんだから文句ないだろう、みたいなむしろ無礼傲慢な心理を背後に漂わせるのである。なんか気にいらない。

「カバーはおつけしますか」

「要りません」

「はい」

で必要十分であろうと思う。「はい」が素っ気なさすぎると思うなら「承知いたしました」くらいでよい。書店のためにカバーをしないでいいというのでない、ただ邪魔だから要らない。おそれ入りますというのはもっと重大なときに用いなければならない。

このことは、「入ります」の現在形を「入りました」の過去形に直してみるとすぐ明らかになる。

「おそれ入りました」

と言うとき、これがただ事でないのはよく分かるだろう。一歩下がって、畳にははー、と平伏するくらいな態度を伴わざるを得ぬ。本当におそれ入ったのであれば、カウンターの向こうでせめて深々と一礼してもらいたいが、そんな店員とは一度もお目にかかったことはない。

(仙台文学館館長)

学芸室日記

○「文学に描かれた伊達政宗パネル展」

10月30日から開催した「文学に描かれた伊達政宗パネル展」。初日を飾ったのは、「奥州・仙台おもてなし集団　伊達武将隊」。迫力の演舞で、「歴女」の皆さんはじめ、大勢の来館者を楽しませてくれました。終了後の記念撮影会では長蛇の列がなかなか途切れませんでした。お昼には、仙台伊達家十八代当主伊達泰宗氏がご来館くださいました。熱心に展示をご覧になり、担当者は嬉しさと緊張で胃が固まりそうでした。お忙しい中、お出でくださいまして、ありがとうございました。

○仙台朗読祭2010

12月5日、6回目を数える「仙台朗読祭」を開催。ゲストにフリーアナウンサーの渡辺祥子さん、詩人の和合亮一さんを迎え、今回は40組のエントリーがありました。3分の持ち時間の中で、自分の好きな文学作品を朗読するというシンプルなものですが、自作の詩あり、絵本あり、エッセイありと、一人一人が作りだすことばの世界に、いつの間にか引き込まれてしまいます。「回を重ねる度に心に染みるものになっています」との声も聞かれるこのイベントは今年も開催予定です。ぜひ一度聴きにいらしてください。

○ミュージアムグッズ

これまでに仙台文学館では、地元で活躍されているイラストレーターや陶芸家、染色家、ガラス工芸家の方々にご協力いただいて、オリジナルグッズを制作し、好評を博してきました。昨年の12月には、仙台の木工作家・斎藤英樹さんにお願いし、木のマグカップを販売したところ、これまた予想を超える大人気!あっという間に完売してしまいました。次なるグッズは夏頃にお目見えの予定です。どうぞお楽しみに。

仙台文学館ニュース　第二十号

仙台文学館 Sendai Literature Museum
〒981-0902 仙台市青葉区北根 2-7-1
TEL 022-271-3020 FAX 022-271-3044
http://www.lit.city.sendai.jp/

[表紙写真] 佐々木靖二
[本文挿画] 吉山 拓
[印刷] (株)ユーメディア

再生紙使用

シリーズ 私の一冊 第十六回

正岡子規『仰臥漫録』

清水 眞砂子

「ある日、ある人が、ある場所で、何かをした。そのことだけでも、人はそこから何かを受けとる。」加藤典洋はその著『僕が批評家になったわけ』（岩波書店　二〇〇五年）の中で、武田百合子の『富士日記』にふれた文章をこの一文でしめくくっています。『富士日記』は私もまた最も好きな戦後の日記文学のひとつで、武田百合子のスケールの大きさ、その豊かさに、以後私は女性ではなく女という言葉が何のためらいもなく使えるようにもなったものです。と、ここまで書いて、そうだった。『富士日記』で私は日記文学の面白さに目覚めたのだった、と気づきました。それからいくつかを読み、ほどなく私は正岡子規の『仰臥漫録』に行きつきました。

『富士日記』にもいつもいつも食べ物のことが出てきますが、『仰臥漫録』にも毎日毎日食したものが記されています。そして、それだけですでに文学となっていることに、私は今、あらためて驚いています。

『仰臥漫録』を書きだした明治三十四年、子規は三十五歳。彼に残された時間はあと一年と十七日しかありませんでした。この時、両肺はすでにほとんど空洞になっていて、医師の目にも生きていること自体が奇蹟と映っていた、と岩波文庫の解説（阿部昭）にはあります。

にもかかわらず、子規は日々文字どおり餓鬼のようにむさぼりくらいつづけます。

たとえば、ふと開いた十月八日の日記には「精神やや静まるされど食気なし」と記しながら、朝食に「小豆粥二わん　つくだ煮　昨日の支那料理の残り　牛乳　西洋菓子」を、昼食には「さしみ　飯一わん　つくだ煮　焼茄子　梨　ぶだう　牛乳　西洋菓子　しほせんべい」を、そして夕食には「さしみ三、四切　粥一わん　ふじ豆　梨　ぶだう　レモン」を食しているのです。

当時の人々の通常の食生活を私は知りませんが、それでも私は何度読んでも、その量の多さに目を回します。子規は食べて食べて、病いを押し返そうとしたのではないか、という意味の文章をどこかで読んだことがありますが、なるほどそうだったかもしれない、と思います。

けれど、『仰臥漫録』に記されているのは、もちろん食べ物のことだけではありません。

自分では寝返りもうてない子規のカリエス患部の繃帯の交換（十月二十八日の日記に子規は「痛み堪へがたく号泣また号泣困難を窮む」と記しています）、下の世話、さらには見舞客の応待等、すべてを引き受けていたのは母親（当時五十八歳）と結婚が破綻して戻ってきた妹律（当時三十二歳）でしたが、この看護の難儀さは想像を絶するもので、今回また本書を読み返しながら、私は人が消臭剤を求め、排泄物の臭いを元から消す薬までも作ってしまった必然を思わずにはいられませんでした。

なのに、九月二十日の日記に子規は記します。

「律は理窟づめの女なり　同感同情のなき木石の如き女なり　義務的に病人を介抱することはすれども同情的に病人を慰むることなし」そして、翌二十一日、子規はまたしても書きます。「律は強情なり　人間に向つて冷淡なり　特に男に向つて shy なり　彼は到底配偶者として世に立つ能はざるなり」けれどつづいて子規は、律にまさる看護婦はいないこと、その上にこの妹は家全般をよく管理し、さらに自分の秘書としてもよく働いてくれていると記し、律が病気にでもなったら大変なことになる、その前に自分が死ぬよう願っている、と書きます。書きながら、同じ日、子規はまた、癇癪持ちで、強情で、気が利かない、と律をののしり、「彼の欠点は枚挙に遑あらず余は時として彼を殺さんと思ふほどに腹立つことあり」と記し、「されどその実彼が精神的不具者であるだけ一層彼を可愛く思ふ情に堪へず」と書くのです。

律は実に聡明な女だったと私は思います。子規にもそれはよくわかっていたようですが、それにしても妹を思う兄のこの情の深さ、激しさは読む者を圧倒せずにはいません。けれど、十月十三日の日記はさらにすさまじく、今なお私は読むたびに言葉を失います。

この日、午後、律は不在。母親は黙って息子の枕元に座り続けます。その母親に子規は「たまらんたまらんどうしやうどうしやう」と幼な子のように訴えます。「しかたがない」母親は静かに言葉を返すしかありません。やがて子規は母親を使いに出し、そのすきに自殺を図ろうとします。なんとか手の届くところに小刀と千枚通しがあります。次の間へいけば一気に死ねる剃刀があるのはわかっていますが、子規には這うこともできません。ためらううちに子規はしゃくりあげて泣きだし、程なくそこへ母親が帰ってきます。

人間の壮絶なドラマが泣き笑いとともにここにはある。私は人がこの世にあることの不思議を思わずにはいられません。

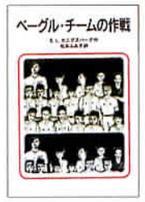
清水　眞砂子（しみず　まさこ）　評論家・翻訳家
1941年生まれ。10年3月まで青山学院女子短期大学で教鞭をとり、「人生は生きるに値する」ことを教えてくれる児童文学作品との出会いを大切にする。訳書にマーガレット・マーヒー『めざめれば魔女』（岩波書店）、カニグズバーグ『トーク・トーク　カニグズバーグ講演集』（岩波書店）、ルーグウィン『ゲド戦記』（岩波書店　日本翻訳文化賞）、著書に『子どもの本のまなざし』（JICC出版局　日本児童文学者協会賞受賞）、『子どもの本の現在』（岩波書店）、『幸福に驚く力』（かもがわ出版）、『青春の終わった日』（洋泉社）、『不器用な日々』（かもがわ出版）などがある。
（撮影　落合由利子）

『仰臥漫録』正岡子規
岩波文庫

仙台文学館ゼミナール2010
「清水眞砂子と読む児童文学」から

「子どもの文学にはほんとにさまざまな幸福のありようが書かれている」と話す、清水眞砂子さんをお迎えして開催したこのゼミナールは、定員を大幅に超える希望者があり、県外からの参加もありました。

「この講座では、私が作品をどう読み、どう楽しんできたのか、そして何が見えて、何がまだ見えていないか、そういうことをお伝えできたらと思います」という言葉で始まったゼミナールで取り上げたテキストは次の三冊でした。



2010年7月11日(日)
E.L.カニグズバーグ『ベーグル・チームの作戦』

「カニグズバーグは、大人の世界に入ろうとして、入りきれていない、人の目や、人との関係を気にし始める時期のこどもたちを書かせたら見事です」

2010年9月12日(日)
フィリパ・ピアス『真夜中のパーティー』

個人的にお付き合いのあるというピアスさんのお話や、作品の舞台として描かれた庭の写真を見せていただきながら進められました。

「だまっている子、ぼんやり見える子の中で、めまぐるしい感情が動いていて、ドラマが展開されていることを、大人は忘れてはいけない。ピアスの作品を読むとそう思います」

2010年11月14日(日)
エレナー・エスティス『百まいのドレス』

「この薄い幼年文学の本の中に、人間の物語の原点…罪をおかして罰を受け、煉獄の苦しみを通って、やがて救済されていくということが描かれていることに改めて驚きました」

時に、子どもをめぐる社会状況に対する鋭い提言を交えながら、「生きるということに大事な力を与えてくれる<物語>っていいなと思います」と、柔らかな語り口でお話くださった清水さん。大人になった今だからこそ味わえる、児童文学の奥深さ、児童文学との出会いの喜びを教えていただきました。

＊清水眞砂子さんのゼミナールは、今年も開催します。

のぞいてみませんか？「仙台文学館ゼミナール」

「仙台文学館ゼミナール」は、二〇〇七年に第一回を開催して以来、毎回たくさんの方々が参加しています。セールスポイントは、幅広いテーマと多彩な講師陣。松も明けて間もない寒い日に、二つの講座の様子をのぞいてみました。

「文章講座～情景を描く」の第4回では、25点の作品が講評を受けました。「クマガイさんは、まず初めにほめてくださる。それから直すべき点を指摘してくれるのでホッとします」と、受講者のお一人。

文章講座 ～情景を描く

「お子さんへの愛情が描かれた、とても微笑ましいお話ですね」

講師のクマガイコウキさんの声がおだやかに響きます。

「でも、途中までは緊張の場面が続いてハラハラしました。せっかくですから、〝微笑ましい話なんですよ〟ということを始めに示してあげた方が、読者の立場からすると助かるかもしれません」

この日のテーマは、「他人を描く」。前回の講座で出された宿題です。各自が八百字の文章を書いて文学館に提出し、それを文学館が作品集にまとめて講座の前に参加者全員に送ります。参加者は講座までに皆の作品を読んで来ることになっていて、自分の感想と比べながらクマガイさんの講評に耳を傾けます。

「講師をやってほしいと相談を受けた時は、正直、何で私が？　という気持ちでした」とクマガイさん。「師匠」で漫画家のいがらしみきおさんからも「何でお前が…」と冷やかされたものの、「文学とは別の切り口で、〝何かを描写すること〟をめぐってアドバイスしてほしい」という文学館からの提案に、「それなら」と決心したそうです。

「映像の仕事でも、作品の完成までには日々たくさんの文章を読んだり書いたりしなければなりません。それが企画書であれ表現の指示であれ、事実や気持ちを的確に表現できなければ意図は伝わりません。そうした私の苦労や経験を役立ててもらえたら、とお引き受けしました」

「始めてみると、さすがは仙台文学館の受講生。こちらの出題意図を十分に汲み取ってくださり、期待を上回る作品も。手練（てだれ）ぞろいを向こうに回した真剣勝負に、緊張しっぱなしです」

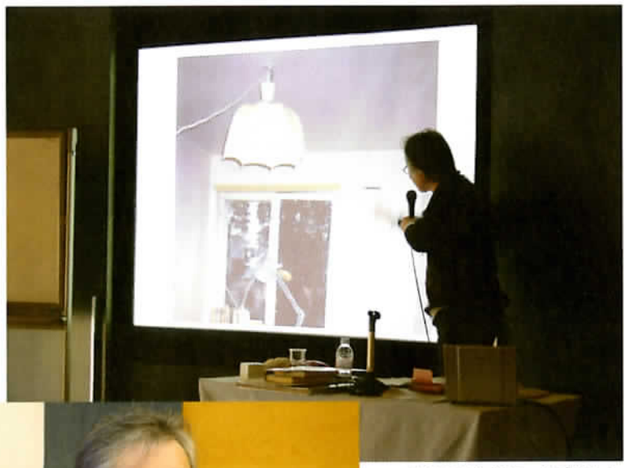
最後にクマガイさんが「次回の課題は〝私の好きなこと〟です。締め切りは二月四日、いつものように…」と伝えて、この日の講座は終わりました。さて三月に開かれる最終回では、どんな作品が読まれるのでしょうか。

講師のクマガイコウキさんは、「ほのぼの　クモモの木のこと」などを監督した映像作家。「教えるというよりは、〝良い読者〟になってあげたい。好き嫌いということから離れて、無心になって誠実に何度も読み返すことが講師の務めだと考えています」

佐伯一麦と読む現代の文学

午後は、「佐伯一麦と読む現代の文学」の最終回。佐伯一麦さんが現代文学の中から厳選した作品を講読するシリーズで、今年度は「エトランゼ（異邦人、旅人）」をテーマに3つの作品が取り上げられました。

この日の作品はリルケの長編小説『マルテの手記』でした。パリで孤独な生活を送るデンマーク出身の青年詩人が、街や出会った人々、芸術などについて日々考えたことがらを紡いだ作品です。有名な作品ですが、ストーリーらしいストーリーもないため、受講者のアンケートには「難解で、何がなんだか分からなかった」「若い頃、途中で挫折した。この機会に再び挑戦してみたけれど、結局読み通せなかった」という感想が相次ぎました。



佐伯さんがノルウェイに滞在した時のスナップ写真を使って、『異邦人』の生活イメージを説明。

「文学が難しいのは当たり前。それは人生が難しいということと同じです。一生かかって読み続けていく本があってもよいわけで、私自身、『マルテの手記』を生きているうちに読み終えるかどうか分かりません」

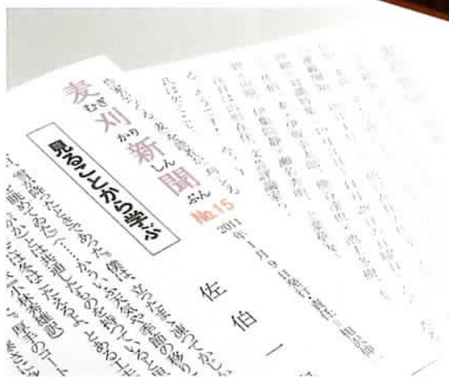
「マルテの手記」

「正直に言うと僕自身も何回も挫折していて、この作品を通して読んだことはたぶん一回もないと思います。どなたかの感想にもあったように、三十ページも読むと疲れてちょっと一休み。そのまま何年も休んで……の繰り返しでした」

「ただ、熟読ではないにしてもさっと目を通した経験があれば、場面や箴言が何かの折に思い起こされて、読み返す。『マルテの手記』はそんな書物なのではないかと思います」

「僕の作品『ノルゲ』も、自分自身がエトランゼだった1年間を描いた作品です。『マルテの手記』を選んだのは、自分との関わりの中でこの作品を読み直してみたいという動機があったからです」

「分からなくても、一生付き合っていけばよい」。佐伯さんの言葉に勇気付けられ、気長に『マルテの手記』と付き合ってみようと気持ちを新たにして、会場を後にしました。



書評や初出雑誌のスクラップなど講座を理解するための貴重な資料集「麦刈新聞」。受講者の一人、相沢さんが毎回用意してくださった労作です。

担当者から

深い言葉の世界を追究し、知的刺激と発見を目指す。それが「仙台文学館ゼミナール」の目標です。古典文学から近現代の文学まで、各分野の第一人者を講師にお招きし、読解や鑑賞にとどまらず、表現・創作など多様な切り口のプログラムをご用意しています。日々の暮らしの中で文学や言葉の世界に関心をお持ちの皆さん、ぜひ新年度から参加しませんか。

〈二〇一一年度のカリキュラム（予定）〉

宮沢賢治『注文の多い料理店』を読む②（講師：佐藤通雅）／佐伯一麦と『雪国』を読む（講師：佐伯一麦）／『平家物語』を読む（講師：佐倉由泰）／文章講座（講師：クマガイコウキ）／俳句実作講座（講師：高野ムツオ）ほか

「歴ネット」
動画配信中

仙台市内の歴史系ミュージアム八館が連携してできた「歴ネット」。全くの歴史系ではない仙台文学館も（なぜか）参加しています。自館だけではなく、互いの館を宣伝しあうことで、来館者の方々の興味関心の幅を広げていただき、そして館の存在をアピールしていこうというのが狙いです。各館で展示資料に関する「歴ネット」シートを作成したり、秋には「歴ネットウィーク」をもうけ、各館のイベントをまとめて宣伝をしたりしました。

歴ネットシート

新しい試みとして、現在、地元企業の同和興業株式会社がスポンサーとなり、株式会社ADOXがケーブルテレビやネットで、動画の配信をしています。映像では館の職員が登場し、各館の見所や資料の紹介などをしています。一年間の限定ですが、評判がよければ継続のチャンスもあるとのことです。一度アクセスしてみてください。

http://www.cat-vnet.tv/category130/index.html

『仙台本のはなし』
ついに完成！！

前号でご紹介していた、仙台文学館ゼミナール二〇〇九―二〇一〇「本作りワークショップ」の冊子が、とうとう完成しました！タイトルは『仙台本のはなし　24人でつくりました』。思い起こせば、まさにゼロからの出発でした。企画が形になるまでゆっくりとした時間が流れ、なかなかゴールが見えない中、時にもどかしさを感じながらも、参加者の方々は、「本が好き」という共通項で強く結びつき、月一回のゼミナール開催時のほかに、グループごとに集まり、取材や原稿作成を地道に進めてきました。約百五十人の方にご協力いただき、文学館という枠を越えて出来上がったこの一冊。読み応えのあるものになりました。

仙台文学館（郵送販売も可）、宮城県内の書店でお求めいただけます。一冊一二六〇円（税込）。

『仙台本のはなし』表紙

文学館の庭で表紙用写真の撮影

目次より
101人　わたしの一冊――仙台ゆかりの101人が選んだわが人生の一冊
対談　短歌と小説　せめぎ合う嘘と真実　俵万智×伊坂幸太郎
歴史小説に描かれた我が郷――仙台の精神風土と伊達氏
街へ出よう、本を探しに。――本好きのためのお散歩MAP
まぼろし文学手帖――あの作品に描かれた仙台を歩く
90歳の前衛芸術家　糸井貫二を訪ねる
閑話及題
遠野の人　佐々木喜善――仙台での足跡
昭和14年第8回直木賞受賞作復刻　大池唯雄「秋田口の兄弟」「兜首」　ほか…

納品されたばかりの本を手にする参加者。地元のテレビ局や新聞社が取材に来ました。

小池光
短歌講座

二〇〇七年六月からスタートした当館館長の小池光短歌講座。二〇一一年の三月で三十二回を数えます。先人の作品鑑賞のほかに、実作指導もあり、参加者には回ごとにお題が出され、作品を一首提出します。その作品すべてに館長が講評を行なうというもので、これまでに取り上げた作品は二五〇〇首をこえます。熱心に学ぶ方が多く、中にはこの短歌講座で実力をつけ、新聞歌壇の常連になられた方も。時に厳しく、辛らつな評も飛び出しますが、的確でそしてユーモアを交えた講評に、毎回笑いが絶えません。新年度も五月から開講します。開催日や参加方法など詳細は仙台文学館にお問合せ下さい。

短歌講座の記録集。各500円で販売中。

瀬名秀明資料特集展
科学と文学の境界を超えて

仙台在住の作家・瀬名秀明さんから寄せられた資料の中から、今回の展示では、デビュー作となった『パラサイト・イヴ』（第二回日本ホラー小説大賞受賞作）、脳の不思議に迫った『BRAIN VALLEY』（第十九回日本SF大賞受賞作）、自伝的要素が含まれている『八月の博物館』を中心に、原稿や構想メモ、参考にした文献資料などをご紹介。科学と文学という二つの分野を横断して活動する、瀬名さんの創作現場をぜひご覧下さい。三月二十一日まで開催。

『パラサイトイヴ』構想メモ

展示室

ぼくは子供の頃から不思議な物語が大好きでした。

いつもと一本違う路地を曲がったら、そこにはまるで知らない町並みが続いていた、というような物語に、たまらなく心惹かれるのです。自分のよく知っている日常の向こうに、未知の世界が広がっていると考えるとわくわくしてきます。

（贈る物語　Wonder　すこしふしぎの驚きをあなたに）

伊集院静
「青葉と天使」

二〇一〇年十月一日から、地元誌『河北新報』で連載が始まった、伊集院静さんの「青葉と天使」の特集コーナーを、常設展示室内に開設しています。警察に追われる詐欺師コウタが主人公のこの小説は、仙台を舞台に、様々な人々を巻き込みながら、現在も展開中です。原稿のほか、『トランヴェール』（JR東日本発行）の巻頭エッセイでコンビを組む、福山小夜さんが手がける挿絵をご紹介。三月二十一日まで開催。

「青葉と天使」挿絵

コラム

文学館の住人たち
－その6－　鯉

文学館の池には鯉が20匹ほどくらしています。以前は数えるほどでしたが、小さな鯉の姿もあり、この池で家族が増えている模様です。夏には元気に群をなして泳いでいて、高校生が携帯で撮影したり、子どもたちがじっとのぞき込むなど、文学館のアイドル（？）になりつつあります。鯉の寿命は諸説ありますが20～30年、またそれ以上とも言われます。末永く文学館を見守ってほしいものです。

池の水が冷たいので、今は底の方で、じっとしています。